

# 虹とともに消えた恋

## 斎藤冬と北村透谷

名掛丁東名会 梅津恵一

新寺の蓮池公園隣に報恩寺という昔からのお寺がある。最近新築したので見違えるような立派なお寺となった。このお寺は明治時代に日本で最初に英文法を取り入れた英語教育の先駆者、斎藤秀三郎の生家の菩提寺であった。また当時国語では大槻文彦が辞書『言海』を編纂し、国文学研究に大きな足跡を残した。言葉の訛りで劣等感を抱く仙台人から、すぐれた二人の言語学者がこの同時期に出たということは誠に不思議な因縁であった。

この報恩寺の基地には斎藤秀三郎の妹、冬が眠っていた。父永頼は仙台藩士で堤通に住んでいた。維新後は新政府の宮城県学務課長となった。厳格な古武士であったが文理、天文などの諸学を好む新知識の持ち主で、子供たちにアルファベットを教え、後には親子の文通は英語で交わした、という超ハイカラの父親であった。母親も家事の傍ら読書を欠かさなかった、という努力家であった。このような家庭で育った冬は少女時代から異彩を放ち、仙台における理知的な若い女性や向上心に燃える少女たちに姉のごとく慕われ、またあこがれの的となった。キリスト教の洗礼を受け、押川方義（東北学院創始者）の愛弟子となり、日曜学校ではオルガンを弾きながら讚美歌を教えていた。

冬は宮城女学校に在学中に、西欧化一辺倒の教育に反対してストライキを起こし、その首謀者として放校処分となった。将来を案じた押川は東京の明治女学校への転校を勧めた。明治女学校は校長巖本善治とその夫人若松賤子によって創立された。宗教学校ではなかったが、キリスト教を奉じて厳粛な中にも自由があり、芸術至上の精神を実生活の中に織り込んだ先進的な女学校であった。先生たちも若く、北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、星野天地など『文学界』仲間のそうしたメンバーが指導していて、当時は女学生のあこがれの学校であった。

冬は明治女学校に入学すると、水を得た魚のごとく才能を発揮した。巖本校長や北村透谷、島崎藤村等の講義に初めて文学や思想に興味を抱き、熱心に耳を傾けた。冬の勉学に対する真剣な態度は透谷の思想に相通じるものがあり、透谷はやがて冬に強く心惹かれるようになった。二人は一つの机を挟んで向かい合い、まるで討論でもするような形で教え、質問し、それに答えた。級友は二人の一问一答を聞いて非常に興味深く勉強するといった有様であったという。

透谷はその頃すでに石坂美那子と大恋愛の末に結婚し、一児を設けていた。その結婚は単なる男女の結びつきではなく、一種の女性を神聖化したもので、外国から来た宣教師達の説いた新しい女性観であった。

透谷は明治25年に『女学雑誌』で「厭世詩家と女性」と題し、「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人生あり」とわが国で最初の大胆な男女の恋愛論を唱えた。これまでの恋愛や男女間のことは何かはしたくないことのように思われていたが、透谷はこれを見事に打破した。それはまさにルネッサンスに始まったとされるヨーロッパ的近代恋愛を理想としたもので、島崎藤村もその思想に大きな衝撃を受けた。しかし透谷は美那子との結婚に失敗し、恋愛と結婚とを区別して考えるようになった。また透谷はキリスト信者で平和主義者でもあったが、西欧の帝国主義的思想が日本にも波及し、侵略戦争に巻き込まれるようになると、それを憂いて嘆くと共に理想と現実のはざままで身動きが取れなくなってしまった。その憂いは冬にも影響を及ぼした。この頃冬は不治の病と言われる肺結核に侵され始めていた。透谷の講義も次第に活気が薄れていった。冬は療養するために仙台に帰ってきたが、自宅には戻れず、宮城病院で絶対安静の床に伏した。

透谷が心身の膠着から自殺したのは明治27年5月27日であった。その死を周囲の人たちは秘密を守って冬には知らせなかった。しかし6月22日にあとを追うように冬はその生涯を閉じた。冬の懐には透谷からの手紙が大事に抱かれてあったという。二人の恋は梅雨の晴れ間に現れた虹のごとく、淡く消えてしまった。

精神的には超越しても実生活では多くの矛盾を残していたのが、その時代の恋愛に対する心理であった。

島崎藤村は名掛丁に下宿していた時に、かつて教え子だった冬のお墓参りを兼ねてか、新寺界隈をよく散歩していた。残念なことに斎藤家の墓は昭和25年に東京に移されて、今は当時を語るものは何もない。

参考文献 『宮城の女性[正]』

中山 栄子 / 著 金港堂出版部 1988.11

『島崎藤村の仙台時代－「若菜集」をめぐって』

藤 一也 / 著 万葉堂出版 1977.9

関連資料 『黙移 明治・大正文学史回想 教養選書 44』

相馬 黒光 / 著 法政大学出版局 1982.6

『北村透谷選集 岩波文庫』

北村 透谷 / [著] 岩波書店 1970.9

『仙台の散策 歴史と文学をたずねて 改訂版』

佐々 久 / 監修 宝文堂出版販売 1999.4

『明治快女伝 わたしはわたしよ』

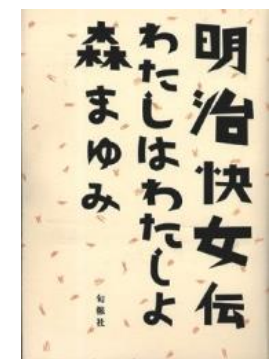
森 まゆみ / 著 労働旬報社 1996.8

『百年文庫 99 道』

ポプラ社 2011.10

『蝶のゆくへ』

葉室 麟 / 著 集英社 2018.8



『明治快女伝  
わたしはわたしよ』  
森 まゆみ / 著  
労働旬報社 1996.8